

<論文>

## 西洋と日本のフェミニズム翻訳

### Western and Japanese Feminist Translation

古川弘子

(東北学院大学・文学部英文学科講師)

#### Abstract

Female speech in Japanese translation is overly feminised compared to real Japanese women's discourse (esp. See Furukawa 2013a). As such, it appears that women's language is not a 'real' language variety used by Japanese women but, rather, a type of knowledge that Japanese women are assumed to possess. That is, the over-feminising convention maintains and reinforces gender ideology and the subordinate position of women in Japanese society, and makes women invisible and unheard in Japanese translation. Thus, this paper investigates how the idea of feminism can be incorporated in Japanese translation, and what the meaning of feminist translation is in the Japanese context by exploring Feminism and western feminist translation.

#### 1. はじめに

これまでの研究で筆者は、女ことばとは明治時代に権威によって作られた言語規範であること、その女ことばは現実社会で使われているものではなく、日本の文学作品（日本語で書かれたり日本語に訳されたりした作品）に使われているものであること、翻訳テキストの女性の登場人物は現実の日本女性よりも言葉づかいにおいて「女らしさ」が非常に強調されて描かれていると実証的に示されることを議論してきた（特に古川 2013a）。また、多元システム理論（Even-Zohar, 2012 [1978]）の観点から言えば翻訳テキストとは文学システムの一部、ひいては日本の社会的・文化的・政治的システムの一部であり、翻訳テキストのなかで女ことばを多用する慣習が日本社会において「女はこうあるべきである」というジェンダー・イデオロギーの流布や維持につながってきたと主張した。

本稿では、これまでと同様に「翻訳テキストはジェンダー・イデオロギーの媒介として機能している」という見地に立ち、日本にとってのジェンダーと翻訳の問題にはどのようなものがあるのか、フェミニズムの思想を日本語への翻訳に取り入れるとしたらどのようなやり方があるのかを考えていきたい。

そのために、まずは西洋、特に北米とヨーロッパで起こったフェミニズム運動について見ていく。このフェミニズム運動は、ジェンダー問題と翻訳との関連性についての議論へと発展し、さらにはフェミニズムを体現するために様々な翻訳方略が試みられるようになってきた。そこで、フェミニズム運動のなかでも特にフェミニズム翻訳について詳しく取

り上げ、西洋におけるフェミニズム翻訳とはどのようなものなのかを考察していく。その上で、フェミニズムの思想を取り入れた翻訳を日本で試みるとすればどのようなものが考えられるのかを、明治時代に二葉亭四迷が行った試みを紹介しながら議論していきたい。

## 2. フェミニズム

1960年代の後半、北米やヨーロッパでフェミニズムの第二波が推し進められ、まさに「フェミニズムの時代 (the era of feminism)」(von Flotow, 1997, p. 1)が始まった。フェミニズムの第一波とは18世紀から20世紀初頭に起こった運動のことで、法による性差別をなくすことを目的としていた。ここで女性の参政権、就労の権利、財産所有権を求めたのが、フェミニズムの最初の動きだった。その後フェミニズム運動はさらに進み、フェミニズムの第二波は職場での機会均等や中絶の合法化を求めたものだ。この動きは学問的な分野にも大きな影響を与え、北米ではジェンダー学に対する学問的関心が高まっていった (ibid.)。この第二波は1960年代前半から1980年代後半にかけて広がり、フェミニズム運動の行動方針は「男に認められている政治的、法的、または経済的な権利を女にも同様に認められるようにする (political, legal, or economic rights equal to those granted to men)」(Offen, 1988, p. 123) ことであった。ここでの平等とは、女が男性優位の社会から選択肢を与えられるのではなく、自らが選び取る権利を持つことだ (Faludi, 2006[1991], p.15)。

1990年代の翻訳学分野では、多くの西洋の理論家にとってフェミニズムが関心の的となっていた。この動きは特にカナダで見られ、学者たちはジェンダー学の視点から翻訳研究をするようになった。この潮流は、カナダの学問分野において翻訳学が重要な位置を占めていたという事情を反映している。カナダでは英語とフランス語の二言語が公用語とされており、翻訳の果たす役割はカナダ社会に不可欠なものなのだ。カナダと比較すると、アメリカの大学での翻訳学の地位はやや劣るといふ (von Flotow, 1997, p. 1)。

日本における翻訳学を考えてみると、日本語には性差を明確にする特性があり、ジェンダーに関する議論は避けられない。実際、「日本語は役割語が発達しており、性差も表れやすい言語であると言える。翻訳とジェンダーを巡る問題は、日本においては非常に可能性のある分野と言えよう」(藤濤, 2013, p.248)との指摘もある。それにもかかわらず、翻訳とジェンダーに関する問題についての議論は、北米やヨーロッパに比べてほとんどなされてこなかった。これには主に2つの理由があるのではないだろうか。

まず、日本ではフェミニズムについての認識が総じて低く、フェミニズム関連の日本語訳がほとんど出版されていないこと、もしくは出版されても絶版となってしまうことだ。例えば、古典とも言えるロビン・レイコフの *Language and Woman's Place* [言語と性—英語における女の地位] (Lakoff, 1975) やデール・スペンダーの *Man Made Language* [ことばが男を支配する—言語と性差] (Spender, 1980)、シモーヌ・ド・ボーヴォワールの *Le Deuxième Sexe* [第二の性] (de Beauvoir, 1949)<sup>1</sup> は日本語訳が出されたものの、現在は絶版となっている。

もう1つの理由として、日本の高等教育における翻訳学が十分に確立されていないこと

が考えられる。若林 (2011, pp. 273-285) が指摘するように、日本での翻訳教育はこれまで実務家養成を主目的としており、翻訳学研究というと欧米で確立された理論の論評、明治初頭から戦時中までの翻訳論をまとめたもの、もしくは花形翻訳者による発言に限られていた。この傾向を示す好例として、翻訳学の主要文献のうち現在までに日本語に訳されたものは4冊のみ、すべて過去数年以内に出版されたものである(『翻訳学入門』ジェレミー・マンデイ著、鳥飼玖美子監訳、2009年発行;『翻訳理論の探求』アンソニー・ピム著、武田珂代子訳、2010年発行;『通訳翻訳訓練—基本的概念とモデル』ダニエル・ジル著、田辺希久子ほか訳、2012年発行;『翻訳研究のキーワード』モナ・ベイカー、ガブリエラ・サルダ一ニャ編集、藤濤文子監訳、2013年発行)。その結果、翻訳学とジェンダー学を結び付けた研究はいまだ発達段階にあると言えるだろう。

### 3. ジェンダー問題と翻訳

20世紀後半になると、数多くのフェミニズム理論家が言語は「Men (人、つまり男)」が作ったもので、男に都合のいい目的を遂げるために使われてきたと考え始めた。とりわけ、スペンダーの *Man Made Language* (Spender, 1998 [1980]) は言語とフェミニズムとの関係性を明らかにし、フェミニズム理論家の注意を喚起した。スペンダーはこう書いている—「英語という言語は文字どおり人(つまり男)によって作られたものだ [.....] そして何よりもまず、英語はいまだに男の支配下にある (the English language has been literally man made and [...] it is still primarily under male control)」(Spender, 1998 [1980], p. 12)。人(つまり男)が作った言語は、女のものの方や現実への認識を支配してきた。そしてこの事実が、女の権利を制限してきたのだ。

言語は私たちの現実に制限を生み出すのに役立つ。言語はこの世界を整理したり分類したり、または操ったりするための手段となるのだ。私たちが共同体の一員となるのも、世界が包括的で意義のあるものとなるのも、私たちが住んでいる世界に何かを生み出すのも、言語を通してなされるのだ (Spender, 1998 [1980], p. 3)。<sup>2</sup>

この観念はサピア=ウォーフの仮説を基にしている。サピア=ウォーフの仮説とは、言語と現実認識に強い相関関係があることを示したもので、私たちが現実を認識するやり方と私たちが使っている言語とは密接にかかわっており、すなわち言語と思考と文化は強固に絡み合っていると唱えた。言語上の範疇はそれぞれの言語によって異なり、個人の考え方の側面はその範疇によって決定されると言うのだ (Gumperz and Levinson, 1996, p. 2, p. 24)。

サピアとウォーフはこの仮説に関して2つの重要な原則「linguistic determinism (言語絶対論)」(Sapir, 1949, p. 162) と「linguistic relativity (言語相対論)」(Whorf, 2001, pp. 363-381) を提起した。Linguistic determinism とは、私たちがどのように世界を知覚するかは言語が決めるという考え方だ。したがって、もし私たちが違う言語を話すのであれば、私たちの

考え方は異なるということになる。この考え方では、もしある人が使っている言語に二次元と三次元の違いがなければ、その人物は次元の違いを理解することができないはずだということになる。

際立って異なる文法を持つ言語の使用者は、異なる種類の観察に関する文法を持っていたり、非常に似通った観察行為から異なる評価を下したりすることが指摘されている。それゆえ、違う文法の使用者は観察の仕方が異なり、現実世界に対していくぶん違った見方をしていると言える (Whorf, 1956, p. 221)。<sup>3</sup>

Linguistic determinism は、言語が人間の知覚を決定するものであると断言しているために一般的に受け入れられている原則ではない。しかし、Linguistic determinism の原則をやや弱めた、linguistic relativity と呼ばれる原則は妥当であると一般に認められている。この原則では、言語がその話し手の考え方にある程度の影響を与えると仮定している。例えば、物事を単語やフレーズと関連づけることができれば、人はその物事を覚えやすくなる。また、人が抽象的な概念を理解する際には、その概念を説明する言葉がその人の使っている言語にあった方が理解しやすくなるというわけだ (Crystal, 1997, p. 15)。

サピア＝ウォーフの仮説はフェミニズムに影響を与え、フェミニズム理論家は言語のなかで女が言及される際の性差別的な表現に目を向けるようになっていった。言語上の範疇が現実認識に大きな影響を与えるという仮説に基づいて、フェミニズム理論家は言語がコミュニケーションの道具としてだけでなく、「巧妙に操られる道具 (a manipulative tool)」(von Flotow, 1997, p. 8) ともなりうると考え始めたのだ。つまり、女が男によって作られた言語を使う以上、女は世界を男の視点から知覚せざるを得ないということだ。

ファウラーの定義によれば、言語とは「社会分類をコード化するための非常に能率のよい媒介物 (highly efficient medium in the coding of social categorization)」(Fowler, 1996, p. 29) である。言語は既存の偏見に満ちた観念を表す言葉として機能するだけでなく、考えを具体化し固定化するものとしても機能する。それゆえ、言語使用に対する態度を変えることは女性解放にとって極めて重要なことなのだ (Cameron, 1992, p. 1)。

したがって、フェミニズム翻訳実践の目的とは、まずは、言語における性差別を排除することにある。ここで要となるものは、社会におけるステレオタイプと言語の形態との関連性について注意を喚起することだ。この考えは、言語の範疇は私たちの知覚に結局は影響を与え、それゆえ言語は差別的な女の表象を生み出すという仮定に基づいている (von Flotow, 1997, p. 14)。

日本語にも日本社会における女の地位の低さを反映した差別的表現は数多くある (夫が妻を誰かに紹介する時に「愚妻」と呼ぶのはその一例だ)。この差別的表現とは言語学上の分類のことで、性差別的な考えを是認する社会状況が生み出したものだ。しかしながら本稿では、日本語で書かれたり日本語に訳されたりした文学作品において、女性登場人物の「女らしさ」がどのような言葉づかいによって作り上げられているかという主題のみを扱

う。この主題は、「女はこうあるべきである」というジェンダー・イデオロギーによって築かれ強化されてきた社会的な期待を反映しているものだ。差別表現も人々の知覚と相関関係を持つものであるが、本稿で扱うフェミニズム翻訳では、その範囲を日本の文学において女性がどのように描写されているかに限定したい。

#### 4. 西洋と日本のフェミニズム翻訳

1990年代後半に2冊の本 *Gender in Translation* (Simon, 1996) と *Translation and Gender* (von Flotow, 1997) が出版され、フェミニズム翻訳研究に大きな影響を与えた。サイモンは著書 *Gender in Translation* のなかで、文学における翻訳の従属的地位や翻訳テキストに表れる女性の抑圧などを批判し改善することを目指ただけではなく、翻訳という行為または翻訳テキストをジェンダー・イデオロギーに異議を唱えるために使うことができると述べている (Simon, 1996, p. 9)。

フォン・フロトローは、より具体的に女性と言語についての問題を解決する2つの方法を示している (von Flotow, 1997, pp. 8-12)。1つは改革主義の方法で、女性差別をなくすためのガイドブックや教育などによって従来の差別的言語から女性を解放することを目指すものだ。もう1つの急進主義の方法は、言語において女らしさを目に見える形にすることで女性の地位の低さを読者に意識させることを目指す。フェミニスト翻訳家として知られるド・ロトビニエール＝ハーウッドの言葉を用いれば、急進主義のフェミニズム翻訳とは女性の存在を可視化することなのだ。

言語において女らしさを可視化することは、現実社会において女性が目に見え、声を持つ存在となることを意味する。フェミニズムとはつまりそういうことなのだ (de Lotbinière-Harwood in von Flotow 1997: 29)。<sup>4</sup>

この言葉はフェミニズム翻訳について語る際にしばしば引用されるが、日本語への翻訳を考えてみると、状況は逆である。なぜならば、日本では女ことばを多用して女らしさを強調する翻訳が慣習として根づいているからだ。この慣習は翻訳されたテキストにおいて、言語のなかの女らしさが強調されているということであり、この慣習によって日本女性の存在は逆に見えないものにされているからだ。つまり、女らしさを強調する翻訳テキストが、日本社会ではジェンダー・イデオロギーを再生する役割を果たしていると言える。したがって、日本の状況におけるフェミニズム翻訳とは、先に引用した言葉を借りればこう言えるのではないだろうか。

言語において女らしさを可視化することは、現実社会において女性が目に見えないもの、声を持たない存在となることを意味する。

筆者は急進主義の立場に立っており、翻訳テキストに使われる女ことばが言語規範とし

での役割を持ち、日本社会にジェンダー・イデオロギーを広めたり、再生したり、強めたりする役割を果たしていると論じてきた (古川 2013a)。しかしながら、フォン・フロトーの急進主義と同じ「現実社会において女性が目に見え、声を持つ存在となる」という目的に達するためには、日本語への翻訳テキストでは正反対の方法を取り入れる必要があるだろうと考えている。女らしさを強調する翻訳ではなく、過剰な女らしさを取り除く翻訳が求められるのだ。西洋のフェミニズム理論が日本社会に取り入れられる時には、そのまま取り入れるのではなく、日本の現状に合わせる必要があるだろう。

#### 4.1. 西洋のフェミニズム翻訳

ここで、西洋のフェミニズム翻訳とは何かを詳しく見ていきたい。20 世紀の終わりごろには急進主義のフェミニスト作家たちが活発にフェミニズム翻訳を行うようになった。その方略とは、新たな言葉を生み出したり、綴り方や文法構造を変革したりすることであった。このような方略によって、著者や語り手、または登場人物の「女らしさ」が強調され、女性が声を持つようになった。

例えば、ケベック出身の作家 Nicole Brossard<sup>5</sup> は、その書名 *L'Amèr. L'Amèr* のなかで新たなフランス語を生み出した。この新語「amèr」は、フランス語の3つの単語「mère (母)」、「mer (海)」、「amer (苦しみ)」を合体させたものだ。これは、フランス語で「海」を表す単語「mer」は「母」を表す単語「mère」に包含されるように、母と海との間にはつながりがあることを示し (日本語にも「母なる海」という表現がある)、それと同時に、母であることは苦痛を伴う経験なのだということを暗示する比喩である (von Flotow, 1997, p. 15)。こういった実験的な翻訳方略は西ヨーロッパや北米で活発に行われ、フェミニズムが翻訳理論に応用されるようになっていった。

フォン・フロトー (von Flotow, 1997, pp. 14-34) によると、急進主義の翻訳実践には3つの方略があるという。その3つとは、「1. 補足すること (supplementing)、2. 序文や脚注で補足説明をすること (prefacing and footnoting)、そして、3. 乗っ取ること (hijacking)」である。

最初の方略である「1. 補足すること」は、起点テキストで暗示されたものと同じ効果を目的テキストで再現することを目指すものだ。例えば、フランス人のレズビアン作家 Michèle Causse は、その著書のなかでいくつかの単語の綴りを変えた。「nul」が「nulle」と書き表されることによって、男性単数形の名詞に「e」をつけると女性単数形の名詞になる文法法則を持つフランス語では女性の存在が可視化される。このフランス語の文法的特徴を利用して、女性の存在を目に見えるように前景化したわけだ。これを英語に訳す際に、ド・ロトビニエール＝ハーウッドは原書が持つ効果と同じものを翻訳テキストでも生み出すために、「e」を太字 (「**e**」) にして強調した。その結果、英語訳文は以下のように表され、英語版でも女性の存在に意識を向けさせることにつながった (Simon, 1996, p. 21)。

‘[n]o one ignores [is ignorant of] the fact that everything is language [...]

‘A mute one speaks to a deaf one [...]’

フォン・フロトーが次に挙げた方略「2. 序文や脚注で補足説明をすること」とは、著者の意図を説明したり、読者の注意を翻訳手法に意識的に向けさせたりするような方略のことだ。例えば、ド・ロトビニエール＝ハーウッドは、リズ・ゴヴァン(Lise Gauvin) 著の *Letters d'une autre* の英語訳序文で、この翻訳が彼女により書きかえられたことを明記している。

読者へ

この翻訳は私がフランス語で読んだものを女性形で書きなおしたものであるということを伝えておきたい。リズ・ゴヴァンはフェミニストであり、私も同様にフェミニストである。しかし、私はリズ・ゴヴァンではない。彼女はこれを男性形で書いている (de Lotbinière-Harwood in von Flotow 1997: 29)。<sup>6</sup>

そして、序文はこの翻訳に対する政治的意図の宣言へとつながっている。

私の翻訳実践は、女性に資するために言葉を語らせることを目的とする政治的な活動である。したがって、翻訳に私の署名をすることは以下を意味する。この翻訳では、言語において女性の存在を目に見えるものとするために、あらゆる翻訳方略を活用している[……] (マンデイ, 2009, p. 205)。<sup>7</sup>

この序文で読者に話しかけているのは、原著者であるリズ・ゴヴァンではなく、翻訳者であるド・ロトビニエール＝ハーウッドだ。ド・ロトビニエール＝ハーウッドの翻訳方略は、言語において女性の存在を可視化すると同時に、翻訳者の存在を可視化するものであり、翻訳者に著者と同様の権限を与えるものだ (Simon, 1996, p. 15)。

最後の方略「3. 乗っ取ること」とは、フェミニズムのメッセージを明示的にするために本文を改変することだ。ド・ロトビニエール＝ハーウッドによる Lise Gauvin 著の *Letters d'une autre* の訳は、この方略の一例だ。翻訳家のなかには、フェミニズム理論家ではない作家の作品を書きなおして明らかなフェミニズム翻訳をする人もいる。

翻訳は「複製する行為 (act of reproduction)」(Simon, 1996, p. 12) だとみなされる傾向があるが、フェミニズム理論家で翻訳家のゴダールは翻訳に対するこういった見地に異議を唱え、フェミニズム翻訳とは「複製ではなく生み出す行為である (production, not reproduction)」(Godard, 1990, p. 90) と定義している。ゴダールの主張は急進主義のフェミニスト翻訳者が持つ考えを明らかにしている。つまり、フェミニスト翻訳者はフェミニストとしてのイデオロギーに基づいた翻訳を実践し、フェミニズム翻訳を生み出すことを目指しているのだ。

しかし、この「乗っ取り」方略には危険も伴う。もしも原著者がフェミニストではなく、原書がフェミニズムのメッセージを含んでいないにもかかわらず、フェミニスト翻訳者が

勝手に書きなおした場合、著作者は誰なのかという問題が出てくる。したがって、過激な書きかえは翻訳者による暴力行為であるとも受け取られるであろう (Simon, 1996, p. 15, p. 28)。

したがって、起点テキストを大幅に書き直すような場合には、翻訳者が慎重に考慮した上で行う必要がある。翻訳者によるテキストの書き直しに関して、1 つここで紹介しておきたい例がある。もし、フェミニスト翻訳者が明らかな性差別表現に出くわした場合、その表現は訳出されるべきであろうか、それとも削除されるべきであろうか？ もし訳出される場合には、その表現はどう訳すべきであろうか？ もし翻訳者が原文に忠実であろうとして性差別表現をそのまま訳した場合、その翻訳行為は女性差別の原著者との共謀ということになってしまうのだろうか？

女性翻訳者のスザンヌ・ジル・レヴァインは、キューバ人作家ギジェルモ・ガブレラ・インファンテ (Guillermo Cabrera Infante) 著の *Tres Tristes Tigres [Three Trapped Tigers]* (1967) を翻訳する際、インファンテの女性蔑視の考えと、女性に対する否定的な比喩が頻出することに戸惑い、翻訳者としての困難に直面した—「こういった本を訳す女性翻訳者として、自分はどうしろというのか？ これを訳す翻訳者は二重の裏切り者ではないのか [...]」 (Where does this leave a woman as translator of such a book? Is she not a double betrayer [...]?) (Levine, 1992, p. 83)。この疑問への答えとして、レヴァインはリスクを取ることにした。男性優位の考えが現れる表現を削除し、女性読者に対して「二重の裏切り者」になることをさけるために性差別表現ではないものに書きかえたのだ。

レヴァイン以外にもこういった方略を取る翻訳者はいるだろう。また、フォン・フロトーは検閲することも選択肢のうちだと述べているが (von Flotow, 1997, p. 27)、偏見に満ちた文を訳すことを拒むこともできたであろう。しかし、性差別表現を修正したり、訳出しなかったりすることが本当に妥当な翻訳方略なのであるだろうか。これらのやり方は、このキューバ人作家の偏見が翻訳テキストでは隠されてしまい、その結果、翻訳テキストの読者は原著者が性差別的な思想を持っていることに気がつかないことになってしまう。読者の視点からこの問題を考えてみると、原著者の偏見をそのまま翻訳テキストで再現し、読者に知らせた方がいいのではないだろうか。その方が、社会における性差別を読者に意識させる効果があったのではないだろうか。性差別表現をそのまま残した翻訳テキストは、性差別撤廃への社会的な動きを作るきっかけとなるかもしれない。男性が持つ女性に対する偏見を隠すことで、読者は偏見をなくすことの大切さに気づく格好の機会を失ってしまったのかもしれない。

サイモン (Simon, 1996, pp. 124-133) は、上に挙げた例のような方略は聖書翻訳に関して言えば害を及ぼすと論じている。聖書には人 (男女含む) を示すのに「men」や「brother」を使うように、男性優位の表現が多い。そこでフェミニズム理論家は、これらを性差がない、また性差別のない言葉に変えようとしている (Simon, 1996, p. 124)。例えば、「ashre ha'is (聖なる, blessed)」という表現は「Blessed is the man」から「Blessed are those」と変えたり、「Brethren [brother]」では「Brothers」の代わりに「Sisters and Brothers」という表現を使っ



たりするようにと推奨している。しかし、サイモンの主張では、聖書の根本にある性差別的表現を覆い隠すことは、読者志向の翻訳であるというよりもむしろ有害なものである。なぜならば、聖書の根底にある女性に対する偏見は隠されるべきではなく、読者に認識されるべきだからである。したがって、翻訳テキストでは性差別表現を可能な限り使うことで、聖書は男性の視点で書かれており、女性に対する偏見が表れているということを示す必要があるとサイモンは述べている。

フェミニズム翻訳に対しては批判もいくつかある (von Flotow, 1997, pp. 77-88)。まず、フェミニズム翻訳は翻訳テキストを読む読者がどのような人であるかによって、方略も実践の仕方も様々であるべきであろう。北米やヨーロッパのようにフェミニズムが確立されていない国や地域では、急進的で実験的なフェミニズム翻訳を受け入れる読者層も限られるであろうし、その結果、フェミニスト翻訳者の意図もある程度弱められるかもしれない。また、フランス語圏のフェミニスト翻訳者による実験的な翻訳などは、言葉遊びがもたらす政治的な力を過剰に評価しているという声もある。さらに、フェミニズム翻訳は主に高等教育を受けた女性によって、知的な試みとして行われることが多いため、読者層は非常に限られる。これらに加えて、これまでも議論してきたように、翻訳という行為は言語間の問題ではなく文化間の問題でもあり、さらには原書が書かれた時代と訳される時代との2つの時代間の問題でもある。したがって、フェミニズム翻訳は原著者の意図を再構築するという問題、ある時代と時代との間やある文化と文化との間の問題、そして翻訳者の意図をどのように取り入れるかという問題との間で調和を図りつつ行う必要があるであろう。

#### 4.2. 日本のフェミニズム翻訳

本稿は西洋のフェミニズム翻訳に影響を受けて書かれたものではあるが、筆者はその方略をそのまま日本語への翻訳に当てはめるべきだとは考えていない。これには大きく3つの理由が挙げられる。まず、急進主義の方法による翻訳テキストは非常に学術的なものが多く、一般に受け入れられるとは限らないこと。2つ目に、既述したように、日本社会では北米やヨーロッパのようにフェミニズムが広く受け入れられているわけではないということ。そして最後に、読者が翻訳テキストに対して持つ期待が翻訳する側の考える規範と一致するとは限らないため、目的文化で受け入れられやすく、適切だと思われるような翻訳が求められることだ (Chesterman, 1997, pp. 65-66)。

明治時代に二葉亭四迷によってなされた、日本初のフェミニズム翻訳とも言える試みの失敗が、読者と翻訳者の規範の衝突を象徴している。二葉亭は『あひゞき』(1888)で画期的な文体を体現する前の1886年、ロシア作家・ゴーゴリの短編小説(未発表)を訳している時に、ロシア人夫婦の関係は日本と違って対等なもので、その関係性が会話に表れていることに気がついた。そこで、二葉亭は当時の社会規範に挑戦し、ロシア小説に描かれた夫婦関係の平等を示すために、女性の社会での従属的な立場を示す女ことばを使わずに夫婦の会話を翻訳しようとした (Cockerill, 2006, p. 266; Levy, 2006, p. 49)。これは、当時作ら

れたばかりであった女ことばが「女らしさ」を示す指標としての役割を果たすということ、そして女ことばは日本社会に新たにできた規範であるということに二葉亭がとりわけ敏感だったためになされた試みだった (Levy, 2006, p. 49)。

確かに、二葉亭は『浮雲』の女性登場人物の会話文に文末詞や丁寧語、敬語などといった女らしさを示す言葉づかいを充てている。しかし、「女らしさ」を強調したそれらの言葉づかいの問題点にも気がついており、社会規範に挑戦するような翻訳をしたのだ。当時進められていた「言文一致」は性、階級、地域によって人を分類する排他的なものでもあり、二葉亭はその規範に挑戦したとも言えるが、坪内逍遙が回顧しているように、当時の世間には受け入れられなかった (Levy, 2006, p. 39, pp. 49-51)。

そのゴーゴリの譯調は、譬へていふと裏店調 (プロレタリア調) とでもいふやうなぞんざいな口吻のものであった。「これでは中流社會とは思はれない」といふと、「いや、外國の夫婦は對等だから、其う譯さなければ、眞相に遠いと思ふ」といつて、夫婦の問答が、共に敬語なしの「おまひ」、「おれ」、「さうかい」、「さうしな」といふ調子で書いてあつたのであつた。例の田口鼎軒の『日本開国の性質』と同見解で、理論としては意義を挿む餘地はなかつたが、「併しそこが藝術となると、とかく連想が邪魔をする。これぢやア、君、裏店の夫婦としか思はれない。「おまひ」を「卿」とするか、「さふかい」を「乞ふ何々せよ」とか、漢文崩しにすれば兎も角もだが、なぞと論じ合つた。懲り屋で、反省家で、懷疑屋である彼れは、更に其後、いろいろと口語式の表現に枕を擡いた (坪内, 1977, pp. 418-419, 傍点は原文ママ)。

二葉亭は『あひゞき』で称賛を受けたが、ゴーゴリやゴーリキーの翻訳では、坪内の言葉にもあるように江戸時代の戯作に使われた言葉と方言を使いすぎていることに対して批判を受けた (Cockerill, 2006, p. 10)。後に「二葉亭調」(ibid.) と呼ばれるようになる独特の言葉づかいが、読者には軽薄に映つたのであろう。確かに、「おまひ」、「おれ」、「さうかい」、「さうしな」といった言葉は江戸時代に使われたものであり、明治の標準語とは相いれないものである。しかし、その軽薄とも取れる語調はゴーゴリの文体とユーモアを再現するのに適したものだ (Cockerill, 2006, pp. 10-11)。もしも二葉亭が、この翻訳テキストに東京・山の手の中流・中上流階級の言葉である標準語と女ことばを使っていたとしたら、ゴーゴリ独特の文体とユーモアは失われてしまっていたであろう。それにもかかわらず、二葉亭の翻訳は読者には受け入れられなかった。

二葉亭の職業作家としてのキャリアは 1885 年から 1888 年までと短い。二葉亭が近代日本文学に残した業績に対して、3 年間のキャリアはあまりにも儂いと言わざるを得ない。これにはゴーゴリの翻訳での失敗が影響しているかもしれない。ロシアの理想主義に影響を受けた二葉亭の理念は、明治の学者志向の文学界には革新的すぎたため、二葉亭は孤立してしまったのだ (Powell, 1983, pp. 14-15)。パウエルが指摘するように、「(二葉亭の) 視

点は当時一般に受け入れられるには進歩的に過ぎ、後に文学活動をあきらめなければならなかったのは不幸であった」(Powell, 1983, p. 14)。

トゥーリー (Toury, 1995, p. 57) の概念を用いれば、読者が持っていた規範に合わせる翻訳が目的文化に寄り添った「受容可能」な翻訳であるということになる。日本の読者は翻訳小説に対してある特定の期待を抱いており、二葉亭の翻訳手法はその期待と衝突してしまったのだ。二葉亭の試みが受け入れられなかったという事実は、言語規範が当時の日本社会でいかに力を持っていたかを証明するものであり、その言語規範が日本の文学界に対して強い影響力を持っていたことを示すものでもある。二葉亭は、ゴーゴリの翻訳の失敗の後に出版した『あひゞき』で言文一致運動の祖として知られるようになるが、その名声を持ってしても性差を示す言語規範を無くすことはできなかったのだ。

二葉亭の挑戦から約 130 年経ったが、日本語に訳されたり書かれたりした文学作品のなかで女性の登場人物は女ことばを使うべきであるという考えは、可視的であれ不可視的であれ、いまだに根強く残っている (古川 2013a)。日本社会における女性の地位は十分とは言えないまでも向上してきているが、女性解放と女性が男ことばを使うことを関連づける人はほとんどいないだろうし、女性が男ことばを使えばむしろ、話者の嫉のなさや性嗜好と結びつける人すらいるだろう (Okamoto, 1995, p. 297; Tanaka, 2004, p. 26)。女性は円滑な人間関係を築くために男ことばが障害になることを知っており (水本, 2005)、それゆえ社会が求める「理想の女らしさ」を演じ、自らそのイメージを維持する役割を担う (Tanaka, 2004, p. 26)。

しかし、男女の言葉は無性化していると言われているし、実際に言語学研究でもそのような結果が出ている (Okamoto, 1995, pp. 318-319; 宇佐美, 2010, pp. 172-173)。そこで、翻訳テキストで男ことばを使ったり過激な言葉づかいをしたりするのではなく、むしろ女ことばを過剰に使うことを控え、原書に描かれた女性登場人物の性格に合うような言葉づかいをしてはいかがだろうか、本稿では提案したい。上述のように、市場や読者の期待も考慮に入れるべきであり、本稿は西洋のフェミニズム翻訳が実践してきたような急進的で学術的でさえある翻訳を勧めるものではない。ただ、現状でやや行き過ぎた部分を中立に近づけてみてはいかがだろうかと考える。

また、女性登場人物が原書では罵声語や俗語を使っている場合、日本語では削除されたり、「女らしい」表現に書きかえられたりすることが多い。1つの例として、*The Edible Woman* (Atwood, 1969) の日本語訳『食べられる女』(大浦暁生訳, 1996) が挙げられる。登場人物で一番女らしい性格として描かれているクララでさえも、原文では「shitty」などの言葉を使っている。クララの言葉づかいは「理想の女らしい言葉づかい」からは逸脱しているが、関連性理論 (Sperber and Wilson, 1995 [1986]) の観点から考えると、1960年代のカナダ社会で女性が言葉づかいの面である程度の自由を持っていたということを示す含意だと受け取れる。しかしながら、「shitty, thanks, [...]」(Margaret Atwood, 2007 [1969], p. 28) が「元気じゃないのよ」(大浦暁生, 1996, p. 35) と訳されているように、「shitty」が削除され、

女性文末詞「のよ」が付加されている。自己にせよ他者にせよ、規制が行われた結果であろうと推測できる（詳細については古川 2013b を参照されたい）。

映画の字幕でも、女性登場人物の性格描写がどのようなものであれ女ことばが過剰に使われたり、罵声語が削除されたりすることはあるそうだと（Nornes, 2006, p. 450）。日本では戦前・戦後に映画字幕の検閲が厳しく、映倫があからさまな性的表現や行為を削除したり緩和したりするよう製作者に求める制度があったが、女らしさや男らしさを示す言葉づかいに関する検閲はなかったという（Nornes, 2006, p. 468, n.8）。それにもかかわらず、映画の字幕翻訳者も「女はこう話すべきである」というステレオタイプに縛られ、翻訳の過程において自己規制（自己による検閲とも言えるだろう）を行っている。その結果、映画字幕に使われる言葉がたとえ実際の登場人物のイメージに合致していなくても、翻訳者は「容易に理解できるパッケージ品（a readily digestible package）」（Nornes, 2006, p. 450）を目指して字幕を作り、そのパッケージ品が流通することになる。

ハーマンズ（Hermans, 1996, pp. 30-31）によれば、規範とは「社会慣習がより強く、命令的になったもの（stronger, more prescriptive versions of social conventions）」であり、私たち一人ひとりにある状況でどのように振る舞うべきかを指図するものだ。日本語への翻訳テキストや日本語で書かれた文学テキスト、または上に挙げたような日本語への映画字幕は「女らしい」話し方という社会規範に導かれ、または統制されて生み出されていると言える。

規範が私たちに指令する力、つまり規範の執行権力は何よりも限界を定め、正しさという概念をゆるぎないものとする。何が「正しい」行動であるか、何が「正しい」言語使用であるか、または何が「正しい」翻訳であるのかといった概念は、社会や文化の構築物なのだ（Hermans, 1996, p. 36）。<sup>8</sup>

この意味で、「適切に翻訳をする」とは社会に広まっている規範、つまりその共同体の多数派が適切だと考えていることにしたがうことだ。しかしながら、多数派が何を考えているのかを正確に知ることは簡単ではない。したがって、翻訳者はどのような種類の翻訳が社会に受け入れられやすいのかを「関係性があったり、公認されていたりするような手本（relevant, canonized models）」（ibid.）にしたがって推測し、「あらたな手本となるような翻訳（another 'model'）」（ibid.）を生み出そうとするのだ。規範が翻訳者の意思決定に影響を与えるような「指図する力（prescriptive force）」（Chesterman and Wagner, 2001, p. 22）を持っている以上、翻訳者の仕事というのは、ある意味では、規範を見つけそれを受け入れることであると言えるだろう。これが自己規制である。この自己規制が翻訳者自身を束縛し、規範をより確固とした不変のものとする。その結果、規範はさらに強く翻訳者を束縛していくことになる。この悪循環が起こるために、自己規制は他者による規制（検閲）よりもやっかいなものである。

この自己規制をやめるということは、ヴェヌティの議論（Venuti, 2008 [1995], p. 125）を用いると「異質化」と言えるだろう。異質化とは、目的テキストで原文に表わされた他者性を可視化することによって、そのテキストが元々は外国語で書かれていたのだということを読者に分からせることを目指す翻訳手法である。罵声語や俗語が異質化によって翻訳テキストにそのまま表わされた場合、日本語への翻訳テキストで女性の登場人物の言葉に女ことばが過剰に充てられることに慣れていた読者は、女性登場人物が罵声語や俗語を使うことに違和感を持つかもしれない。しかし、これまでの翻訳テキストの方が、実は原書に描かれた登場人物のイメージとは違う「女らしい」言葉を充てられていたのだと気がつくきっかけになるのではないだろうか。これは異質化の効果として期待されるものだ。

ヴェヌティ（Venuti, 2008 [1995]）が述べているように、翻訳が起点テキストの他者性を目的テキストの読者に伝えるものであるならば、同時に異質性をも伝えるものでもある。

異質化を目指す翻訳とは、受容する側の状況では傍流とされている言語的または文化的な価値観、ここには受容文化からは締め出されていた外国文化をも含むが、これらを取り入れることによって受容文化において支配的なものを拒むことであり、従来の文化的慣習とは際立って意見を異にするものだ。なぜならば、こういった違いというものは事実上、支配的価値観に対する抵抗に等しいからである（Venuti, 2008 [1995], p. 125）。<sup>9</sup>

したがって、フェミニズム翻訳の一環として、女性登場人物の罵声語なども、その言葉づかいを読者に示すために罵声語の意味を考慮した訳出をすることを提案したい。これらの「理想の女らしさから逸脱した」表現は、女ことばの過剰使用に慣れている読者にとっては前景化されたものと映るであろう。この前景化された言葉づかいが、読者にこれまでの慣習について気づかせ、あるいは疑問を抱かせ、さらにはその慣習を打ち砕くきっかけとなるのではないかと期待している。

## 5. おわりに

本稿ではフェミニズムの観点から、翻訳者、翻訳という行為、そして翻訳テキストを考察し、女性の地位向上のために翻訳という行為をどのように利用できるのかを探ってきた。西洋で生まれ、活発に研究されてきたフェミニズム翻訳研究であるが、そのまま日本に輸入する必要はない。「現実社会において女性が目に見え、声を持つ存在となる」ための翻訳であるという基本理念を保ちつつ、日本の現状に合った取り入れ方ができればいいのではないかと考える。

れいのるず＝秋葉（1993, p. 20）は、もしも女性が男性のように自分の意見を言うように奨励されて育ってきたのであれば、女性は何の制約もなく声を上げることができるであろうと述べている。日本女性は小説や翻訳小説に使われるステレオタイプに影響を受けた「女らしい」話し方に慣れてすぎており、それが自身の話し方や振る舞いを規制している

ことに気がついていないのではないか。女ことばとは規範であり、翻訳テキストはジェンダー・イデオロギーを媒介しているということが、もっと議論されていいように思う。そして、本稿が提案するフェミニズム翻訳が、女性が声を上げるためのささやかなきっかけとなることを願う。

\*本研究は日本学術振興会の研究費助成を受けました（平成 25・26・27 年度科学研究費補助若手研究(B)「翻訳研究アプローチによる言語規範としての女ことばに関する研究」研究代表者：古川弘子、課題番号：25760015）。

.....  
**【著者紹介】**古川弘子(Furukawa Hiroko)東北学院大学文学部英文学科講師。雑誌・書籍の編集に携わった後、英国 University of East Anglia より PhD 取得(Literary Translation / 2011 年)。同大学のポスドクター研究員を経て 2012 年 4 月より現職。  
.....

**【註】**

- 1 *Le Deuxième Sexe* [第二の性] (Beauvoir, 1949)には、かつて2種類の日本語訳が存在した。まず 1953 年～1955 年に生島遼一訳が新潮社から刊行され、1997 年に「『第二の性』を原文で読みなおす会」が同社から新訳を刊行している。新訳が出された理由は、「その[筆者注：生島訳]の功績は大きかったが、当時の日本男性の視点から訳されているせいか、原文を曲解している面がある」(井上, 木村, 1997, p. 371, 傍点は原文ママ) ためだ。生島訳の問題点はいくつか挙げられる。まず、本の構成が変えられ、実存主義に基づいた理論的説明が割愛されたり後半に回されたりしているために、ボーヴォワールの執筆の意図や立脚点が不明瞭となってしまったこと。そして、自由間接話法の訳出に誤解が見られるため、ボーヴォワールの考えと他からの引用の区別が曖昧で分かりにくかったこと。さらには、いくつかの訳語や解釈に誤解があったことである(井上, 木村, 1997, pp. 371-373)。現在では生島版、「『第二の性』を原文で読みなおす会」版がともに絶版となっている。
- 2 ‘Language helps form the limits of our reality. It is our means of ordering, classifying and manipulating the world. It is through language that we become members of a human community, that the world becomes comprehensible and meaningful, that we bring into existence the world in which we live’ (Spender, 1998 [1980], p. 3). 本章中の英語文献からの引用は、特に記述がない限り拙訳である。
- 3 ‘[...] users of markedly different grammars are pointed by their grammars toward different types of observations and different evaluations of externally similar acts of observation, and hence are not equivalent as observers but must arrive at somewhat different views of the world’ (Whorf, 1956, p. 221).
- 4 ‘[...] making the feminine visible in language means making women seen and heard in the real world. Which is what feminism is all about’ (de Lotbinière-Harwood in von Flotow 1997: 29).

- 5 本稿中の外国人理論家・翻訳家・作家の名前は『翻訳学入門』（ジェレミー・マンデイ著，鳥飼玖美子監訳，2009）に拠ったが、日本語訳の普及していない外国人理論家・翻訳家・作家名に関しては、アルファベット表記のままにした。
- 6 ‘Dear reader,  
Just a few words to let you know that this translation is a rewriting in the feminine of what I originally read in French. I don’t mean content. Lise Gauvin is a feminist, and so am I. But I am not her. She wrote in the generic masculine [...]’ (de Lotbinière-Harwood in von Flotow, 1997, p. 29).
- 7 ‘My translation practice is a political activity aimed at making language speak for women. So my signature on a translation means: this translation has used every possible feminist translation strategy to make the feminine visible in language. Because making the feminine visible in language means making women seen and heard in the real world. Which is what feminism is all about’ (de Lotbinière-Harwood in von Flotow, 1997, p. 29).
- 8 ‘The directive force of norms, their executive arm, serves among other things to delimit and secure these notions of correctness. The notion of what constitutes “correct” behaviour, or “correct” linguistic usage, or “correct” translation, is a social and cultural construct’ (Hermans, 1996, p. 36).
- 9 ‘Foreignizing translation is a dissident cultural practice, maintaining a refusal of the dominant by developing affiliations with marginal linguistic and cultural values in the receiving situation, including foreign cultures that have been excluded because their differences effectively constitute a resistance to dominant values’ (Venuti, 2008 [1995], p. 125).

#### 【参考文献】

- Atwood, M. (2007 [1969]). *The Edible Woman*. London: Virago.
- de Beauvoir, S. (1997 [1949]). *Le Deuxième sexe [The Second Sex]*. (Trans.) E.M. Parshley. Paris: Gallimard.
- Cameron, D. (1992, 2<sup>nd</sup> edition). *Feminism and Linguistic Theory*. Basingstoke: Macmillan.
- Chesterman, A. (1997). *Memes of Translation: The Spread of Ideas in Translation Theory*. Amsterdam and Philadelphia: J. Benjamins.
- Chesterman, A. and E. Wagner. (2001). *Can Theory Help Translators?: A Dialogue between the Ivory Tower and the Wordface*. Manchester: St. Jerome Publishing.
- Cockerill, H. (2006). *Style and Narrative in Translations: The Contribution of Futabatei Shimei*. Manchester: St. Jerome Publishing.
- Crystal, D. (1997, 2<sup>nd</sup> edition). *The Cambridge Encyclopaedia of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Even-Zohar, I. (2012[1978]). ‘The Position of Translated Literature within the Literary Polysystem’, In L. Venuti (Ed.), *The Translation Studies Reader*. (pp. 162-167). London: Routledge.
- Faludi, S. (2006 [1991]). *Backlash: The Undeclared War against American Women*. New York: Three Rivers Press.

- von Flotow, L. (1997). *Translation and Gender*. Manchester: St Jerome and Ottawa: University of Ottawa Press.
- Fowler, R. (1996 2<sup>nd</sup> edition), *Linguistic Criticism*, Oxford: Oxford University Press.
- Godard, B. (1990). 'Theorizing Feminist Discourse/Translation'. In S. Bassnett and A. Lefevere (Eds.). *Translation, History and Culture*. (pp. 87-96). London: Pinter.
- Gumperz, J. and S. Levinson (Eds.). (1996). *Rethinking Linguistic Relativity*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hermans, T. (1996). 'Norms and the Determination of Translation: A Theoretical Framework'. In R. Alvarez and M. Vidal (Eds.). *Translation, Power, Subversion*. (pp. 25-51). Clevedon: Multilingual Matters.
- Lakoff, R. (1975). *Language and Woman's Place*. New York and London: Harper and Row.
- Levine, S. (1992). 'Translation as (Sub)version: On Translating Infante's Inferno'. In L. Venuti (Ed.). *Rethinking Translation: Discourse, Subjectivity, Ideology*. (pp. 75-85). London: Routledge.
- Levy, I. (2006). *Sirens of the Western Shore: The Westernesque Femme Fatale, Translation, and Venacular Style in Modern Japanese Literature*. New York: Columbia University Press.
- de Lotbinière-Harwood, S. (1989). 'About the *her* in other'. Preface to *Letters from an Other by Lise Gauvin*. In L. von Flotow (1997). *Translation and Gender*. Manchester: St Jerome University of Ottawa Press.
- Nornes, M. (2006 [1999, revised in 2004]). 'For an Abusive Subtitling'. In L. Venuti (Ed.). *The Translation Studies Reader*. (pp. 447-469). London: Routledge.
- Offen, K. (1988). 'Defining Feminism: A Comparative Historical Approach'. *Signs*. Vol.14, No.1: 119-157.
- Okamoto, S. (1995). 'Tasteless' Japanese: Less 'Feminine' Speech among Young Japanese Women. In K. Hall and M. Bucholtz (Eds.), *Gender Articulated: Language and the Socially Constructed Self*. (pp. 297-325). New York and London: Routledge.
- Powell, I. (1983). *Writers and Society in Modern Japan*. Tokyo and New York: Kodansha International.
- Sapir, E. (1949). 'The Status of Linguistic as a Science'. In D. Mandelbaum (Ed.). *Selected Writings of Edward Sapir in Language, Culture and Personality*. (pp. 160-166). Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Simon, S. (1996). *Gender in Translation: Culture and Identity and the Politics of Transmission*. London: Routledge.
- Spender, D. (1998 [1980]). *Man Made Language*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Sperber D. and D. Wilson. (1995 [1986, 2<sup>nd</sup> edition]). *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- Tanaka, L. (2004). *Gender, Language and Culture: A Study of Japanese Television Interview Discourse*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Co.
- Toury, Gideon (1995), *Descriptive Translation Studies and Beyond*, Amsterdam: John Benjamins



- Publishing Company.
- Venuti, L. (2008 [1995, 2<sup>nd</sup> edition]). *The Translator's Invisibility: A History of Translation*. London: Routledge.
- Whorf, B. (1956). *Language, Thought, and Reality: Selected Writings*. Cambridge: Technology Press of Massachusetts Institute of Technology.
- (2001). 'The Relation of Habitual Thought and Behavior to Language'. In A. Duranti (Ed.). *Linguistic Anthropology: A Reader*. (pp. 363-381). Chicago: Blackwell Publishing.
- Woolard, K. (1998). 'Introduction: Language Ideology as a Field of Inquiry', In P. Kroskrity, et al., (Eds.), *Language Ideologies: Practice and Theory*. (pp. 3-47). New York and Oxford: Oxford University Press.
- アトウッド, M. (1996) 『食べられる女』(大浦暁生訳)新潮社
- 井上たか子, 木村信子(1997) 「訳者あとがき」ド・ボーヴォワール, S. 『決定版 第二の性 I 事実と神話』(井上たか子, 木村信子監訳) (pp. 371-374)新潮社
- 宇佐美まゆみ(2010) 「ポライトネスとジェンダー—隠されたヘゲモニー」中村桃子(編) 『ジェンダーで学ぶ言語学』 (pp. 160-175)世界思想社
- ジル, D. (2012) 『通訳翻訳訓練—基本的概念とモデル』(田辺希久子ほか・訳)みすず書房
- 坪内逍遙(1977) 「柿の蒂」『逍遙選集 別冊第四』 (pp.393-670)第一書房
- ピム, A. (2010) 『翻訳理論の探求』(武田珂代子・訳)みすず書房
- 藤濤文子(2013) 「訳者解説—背景理解のための補足情報」ベイカー, M., サルダーニャ, G. 『翻訳研究のキーワード』(藤濤文子・監訳) (pp. 225-255)研究社
- 古川弘子(2013a) 「女ことばと翻訳—理想の女らしさへの文化内翻訳」『通訳翻訳研究』第13号: 1-23.
- (2013b) 「女ことばに起因する翻訳の問題」『翻訳研究への招待』第9号: 1-18.
- ベイカー, M., サルダーニャ, G. (2013) 『翻訳研究のキーワード』(藤濤文子・監訳)研究社
- マンデイ, J. (2009) 『翻訳学入門』(鳥飼玖美子・監訳)みすず書房.
- 水本光美(2005) 「テレビドラマにおける女性言葉とジェンダーフィルター—文末詞(終助詞)使用実態調査の中間報告より—」『日本語とジェンダー』第5号  
[http://www.gender.jp/journal/no5/3\\_mizumoto.html](http://www.gender.jp/journal/no5/3_mizumoto.html) (2013年2月22日)
- れいのるず=秋葉かつえ(1993) 「座談: 女ことばと日本語文化」れいのるず=秋葉かつえ(編) 『おんなと日本語』 (pp. 3-30)有信堂
- 若林ジュディ(2011) 「日本におけるトランスレーション・スタディーズの位置づけ」、佐藤=ロスペアグ ナナ(編) 『トランスレーション・スタディーズ』 (pp. 271-289) みすず書房

